

第5章 東南アジアのエスニック・ポリティクス概観 ——研究動向と各国の民族構成——

中村 正志

要約：

東南アジアでは、どの国においても民族問題が政治を動かす重要な要因のひとつだが、民族と政治の関係性は国ごとに異なる。そのためこの地域のエスニック・ポリティクスに関する研究は、いまでも一国研究が主流である。このような研究状況にあって、東南アジアにおける民族と政治の関係性を概観しようとするなら、どのような枠組みを用いればいいのか。本稿では、人口センサスを用いて各国の民族構成と宗教構成を整理したうえで、支配的民族集団が存在するか否か、支配的な宗教があるどうか、という2つの軸を設定することが、簡便だが有益な枠組みになりうることを示す。

キーワード：

東南アジア，民族問題，エスニック・ポリティクス，人口センサス

はじめに

東南アジアでは、どの国においても民族問題が政治を左右する重要な要因になっている。典型的な多民族国家であるマレーシアや、「多様性のなかの統一」を国家の標語に掲げるインドネシアはもちろんのこと、主要民族が国民の9割以上を占めるタイやカンボジアでも、民族問題のマネージメントは重要な政策的課題である。

ただし、ひとくちに「民族問題」といっても、その内容は国ごとに異なる。また同じ国でも、時代が変われば民族問題の争点は変わる。たとえば、日本でもよく知られているように、マレーシアは先住民族（ブミプトラ）を支援する政策を長年にわたり実施してきた。その背景にはマレー人と華人のあいだの経済格差がある。政府は当初、マレー農村の貧困を問題視して対策に力を注いだが、のちに政策の重点をビジネス支援に移した。隣国のタイに目をやると、21世紀に入りマレー・ムスリム人口が多い南部でテロが頻発しており、これがいまもっとも深刻な民族問題だといえる。ミャンマーでも、昨年（2017年）、ムスリムであるロヒンギヤの人びとと軍が衝突し、多数の死傷者と難民が出る事態となった。

国ごとに具体的なイシューが異なることから、東南アジアのエスニック・ポリティクスに関する研究はひとつの国を分析対象としたものが多い。2～3の国を扱った文献なら少なからず存在するが、域内11カ国を包括的に扱う学術研究は管見の限り見当たらない。国によって問題の質が異なるため、11カ国を網羅しようとするとは比較の軸が立てづらいのだと考えられる。

とはいえ、東南アジアにおける民族と政治の多様な関係性を各国ごとに勉強するのは、膨大な時間を必要とするため誰にでもできる作業ではない。ゆえに、この地域の民族問題を概観するための視座が必要である。エスニシティ、すなわち言語や宗教、人種、出自といった人びとの属性が、いかなる社会問題と結びつくのか。それはどう争点化され、誰によって政治の場へ持ち込まれるのか。政府はどんな政策を実施してきたのか。その政策はどんな結果をもたらしたのか。これらの一連の論点を整理し、東南アジアの状況を概観するための簡便な枠組みを提供することが、この研究会での重要な課題である。

中間報告である本稿では、そのための準備作業として、東南アジアにおけるエスニック・ポリティクスに関する最近の研究動向をまず把握する(第1節)。次いで、もっとも基礎的な資料である人口センサスを用いて、各国の民族構成を概観する(第2節)。そのうえで、11カ国を民族面、宗教面において他を圧する規模の集団が存在する国とそうでない国の2つのカテゴリーに分類することが、この地域におけるエスニシティと政治の関係性を概観するうえで有益な比較軸になりうることを指摘する(第3節)。最後に、次年度にむけて今後の課題を整理する(おわりに)。

本稿はあくまで中間報告であり、ここでの考察は暫定的なものである。最終成果は2019年度に刊行される見込みである。引用等にあたっては最終成果をご参照いただきたい。

第1節 東南アジアのエスニック・ポリティクスに関する研究動向

民族問題は、東南アジアの社会と政治に関する最重要テーマのひとつである。独立期を扱った研究ではナショナリズムが中心的なテーマであり、東南アジアのケーススタディはナショナリズム研究に多大な貢献を果たしてきた。ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』はその代表例である(アンダーソン訳書1987)。

独立後は、多くの国で国民形成(nation building)が国家的課題になった。東南アジアでは、程度の差こそあれ、いずれの国にもエスニック集団間の格差や差別がある。そのなかで、エスニシティの垣根を越えた国民意識をいかに醸成するか。とくに深刻なエスニック紛争を経験した国の政府は、再発防止のために国民形成に注力した。これとは逆に、一部のエスニック集団を排除することによって国民の一体性を維持しようとした国もある。国民形成と、それにとまなう少数派の包摂/排除という問題は、いまでも学術研究上の重要なテーマである(たとえば Miller ed. 2014, Snitwongse and Thompson eds. 2005,

Suryadinata ed. 2004)。

近代化が進んだ現代においては、エスニシティと市民社会の関係が新しい重要テーマになっている。1970年代以降、東南アジアにおいても、消費者利益の保護や人権擁護、自然環境保全、女性の権利の推進などを目的とする市民社会組織が誕生した。消費者問題や環境問題は影響を受けるすべての人びとにとっての関心事であり、これらのイシューを扱う市民社会組織はエスニシティの垣根を越えた水平的なつながりを生み出した。ただし、共通の出自や信仰、言語を紐帯とする伝統的な組織が廃れたわけではなく、いまでもエスニック政党が強い支持基盤をもつ国もある。現在の東南アジアでは、多くの国でエスニックな紐帯にもとづく組織とエスニシティの垣根を越える組織とが共存しており、これら組織がときには協調し、ときには競合、対立して、政治的争点の形成に強い影響を与えている。

このような状況は、2010年に刊行されたアレン・ヒッケンを編者とする全4巻の論文集『現代東南アジアの政治』(*Politics of Modern Southeast Asia*)に反映されている¹。このシリーズの第2巻には、「市民社会、エスニシティ、宗教」を扱う16本の論文が収録されており、この地域で新旧さまざまな組織がせめぎ合う様子が見て取れる(Hicken ed. 2010)。ただし、論文のほとんどは1国のみを扱うものである。近年の研究においても比較研究が少ないことは、それが容易でないことの証しであろう。この本は、国ごとの研究を一つひとつ読むことを通じて、読者が東南アジアにおけるエスニック・ポリティクスのさまざまな側面を知ることができるようにつづられている。

ナショナリズムの形成過程に関する近年の歴史研究のなかには、この地域を広くカバーしたものもある。Tarling (2004)は、東南アジア全域を対象に、植民地国家の建設からナショナリズムの誕生、独立、その後の危機や国民形成までを扱った本である。ナショナリズムについては、「他者」としての中国と華人が果たした役割という観点で各国を分析した研究もある(Reid 2010; Suryadinata 2015)。しかし、こうした研究はまだ数が少なく、東南アジアにおけるエスニック・ポリティクスの全体的なイメージは、国ごとに書かれた文献を読むことでしか得られないのが現状である。

とはいえ、東南アジアの民族問題に広く関心をもつ人であっても、11カ国分の書籍や論文を読む時間的余裕がある人は稀であろう。多様で複雑なこの地域における民族と政治の関係を大づかみに把握するための認識枠組みが必要である。では、どのような枠組みが有効だろうか。次節では、それを考える作業の第一歩として、もっとも基礎的な資料である人口センサスを用いて、各国の民族構成を概観する。

¹ この論文集は、刊行済のジャーナル論文64本を集成したものである。第1巻は「国家、国家建設、国家と財界の関係」、第2巻は「市民社会、エスニシティ、宗教」、第3巻は「体制と制度」、第4回は「開発、危機、協力」にかかわる論文が収録されている。

第2節 東南アジア 11 カ国の民族構成

表1は、最新の人口センサスにもとづき、東南アジア 11 カ国のエスニック集団とその人口規模を整理したものである。以下では、その内容をより詳しくみていく。

表1. 東南アジア 11 カ国の人口と主要エスニック集団

	総人口	最大集団 ¹	その他のエスニック集団（人口比）
フィリピン（2010年）	92,097,978	タガログ(24.4%)	ビサヤ(11.4%), セブアノ(9.9%), イロカノ(8.8%), ヒリガイノン(8.4%)など。
インドネシア（2010年）	237,641,326	ジャワ(40.2%)	スンダ(15.5%), バタック(3.6%), マドゥラ(3.0%), プタウィ(2.9%)など。
東ティモール（2015年）	1,183,643	テトゥン語(36.7%)	マンバイ語(16.5%), マカサイ語(10.5%)など。
マレーシア（2010年）	28,334,135	マレー人(54.6%)	華人(24.6%), インド人(7.6%)など。
シンガポール（2010年）	5,076,700	華人(74.1%)	マレー(13.4%), インド人(9.2%), その他(3.3%)。
ブルネイ（2011年）	393,372	マレー人(65.7%)	華人(10.3%), その他(24.0%)。
ミャンマー（2014年）	51,486,253	ビルマ族(未公表 ²)	シャン族, カレン族, ヤカイン族, モン族, カチン族, カヤー族など。
タイ（2010年）	65,981,659	タイ語(90.7%)	マレー語(2.3%), ビルマ語(1.3%), タイ・ルーイ族語(1.2%)など。
カンボジア（2008年）	13,395,682	クメール語(96.3%)	チャム語(1.5%), ベトナム語(0.5%)など。
ラオス（2015年）	6,492,228	ラオ族(53.2%)	カム族(11.0%), モン族(9.2%), Phouthay(3.4%), Tai(3.1%)など。
ベトナム（2009年）	85,846,997	キン族(85.7%)	タイー族(1.9%), タイ族(1.8%), ムオン族(1.5%)など。

1. インドネシア, マレーシア, ベトナム, ラオスは市民人口に対する比率。シンガポールは市民+永住権取得者のなかでの割合。

2. 1983年センサスにおけるビルマ族の比率は69.0%。

出所：各国の人口センサス報告書（参考文献リスト参照）をもとに筆者作成。

フィリピン

フィリピンは 7000 以上の島々からなる島嶼国である。2010 年の人口センサスによれば、当時の総人口は 9209.8 万人、うち 9192.1 万人（99.8%）はフィリピン市民である²。フィリピンの人口センサス（2010 年）は、国内の「エスニシティ」を 179 の集団と「その他の地域言語/エスニシティ」（Other Local Dialects/Ethnicity）の 180 種に分類している。「その他」の項目が示すように、ここでは共通の言語を話す集団がエスニック集団と見なされている。

言語を分類の基準とすると、数のうえで突出した集団が存在しないのがフィリピン社会の特徴である。最大集団は人口の 24.4% を占めるタガログで、次いでビサヤ（11.4%）、セブアノ（9.9%）、イロカノ（8.8%）、ヒリガイノン（8.4%）と続く。これら上位 5 集団を合計しても、総人口の 63.0% に過ぎない³。

一方、宗教を分類基準とするなら様相はかなり異なる。最大集団はカトリックで、人口の 80.6% を占める。次いでイスラーム（5.6%）、キリスト教福音派（2.7%）、イグレスシア・ニ・クリスト（2.5%）、プロテスタント（1.2%）と続く（NOS 2013, Table 9）。人口のうえでは、カトリックが優位集団、その他の宗教・宗派は少数派、という関係にある。

² 外国市民のうちもっとも多いのはアメリカ人（3 万人）と中国人（2.8 万人）で、以下日本人、インド人、韓国人と続く。この 5 カ国の市民が外国市民総数の 48% を占める（NSO 2013: Table 10）。言語別人口、宗教別人口の数値には外国市民も含まれている。

³ NSO（2013, Table 11）より算出。上位 10 集団の合計は人口の 81.2% である。

インドネシア

インドネシアは1.3万以上の島々からなる島嶼国で、世界有数の人口大国である。2010年時点の総人口は2億3764.1万人（世界第4位）で、うち2億3672.8億人（99.6%）がインドネシア市民である（BPS 2011, Table 1）。

インドネシアの人口センサスは、民族集団（*suku bangsa*）を次のように定義している。「*Suku bangsa* は、エスニック集団（*kelompok etnis*）であり、代々受け継がれて形成された社会的文化である」（BPS 2011, 4）。その数は1300あまりにのぼる。人口センサスでの分類は、調査対象者の自己申告にもとづいて行われている。

最大集団はおもにジャワ島に居住するジャワ人である。ジャワ人が人口（外国市民を除く）に占める割合は40.2%で、次いでスンダ（15.5%）、バタック（3.6%）、マドゥラ（3.0%）、ブタウィ（2.9%）が続く。これら上位5集団の合計は人口の65.2%であり、最大集団の規模こそ大きいものの、フィリピンと同じくインドネシアも民族的多様性の高い社会である⁴。

インドネシア社会も、宗教で分類すると多数派と少数派に別れる（BPS 2011, Table 2）。最大集団はイスラームで、総人口の87.2%を占める優位集団である。次いでプロテスタント⁵（7.0%）、カトリック（2.9%）、ヒンドゥー教（1.7%）となっている。

東ティモール

東ティモールは、2002年にインドネシアから独立した新興国である。16世紀にポルトガルの植民地となり、旧オランダ領地域がインドネシアとして独立した後もポルトガルの支配が続いた。1974年にポルトガルで独裁政権が打倒されると東ティモールで左派の独立運動が活発になったが、1976年にはスハルト政権下のインドネシアに併合されてしまった。1998年にスハルト政権が倒れると、翌年の住民投票で独立を求める意思が確認され、2002年に独立が実現した。2015年の総人口は118.4万人で、うち117.6万人（99.4%）が国籍保持者である（GDS 2016a）。

東ティモールの人口センサスでは、民族は調査項目に入っていない。かわりに、母語や宗教を問う質問がある。母語で分類すると、最大集団は公用語のひとつであるテトゥン語の話者だが、*Tetun Prasa* と *Tetun Terik* の話者を合わせても人口の36.7%にとどまる。ただし、母語に加えてテトゥン語を話す住民が多く、人口の8割はテトゥン語を話せる⁶。テトゥン語話者に次いで規模が大きいのはマンバイ語（16.5%）で、マカサイ語（10.5%）、

⁴ BPS（2011, Table 2）より算出。上位10集団の合計は人口の76.3%である。

⁵ 原語は *Kristen*。この語は、とくに *Katolik* と併記された場合にはプロテスタントを意味する。

⁶ *Tetun Prasa* ないし *Tetun Terik* を母語とする者と、これらを第2言語ないし第3言語とする者の数を合算すると、人口の87.7%に及ぶ（GDS 2016b）。ただしこの数値は、*Tetun Prasa* を母語とし *Tetun Terik* を第2言語とすると答えた者などを含むため、テトゥン語話者の総計値と見なせない（重複があり過剰）。重複分を最大に見積もって上記の数値から引くと、人口の78.5%に相当する。

バイケヌ語（5.9%）と続く。東ティモールではポルトガル語も公用語であるが、ポルトガル語を母語とする住民は人口のわずか0.1%で、第2・第3言語として話す者を加えても5.4%に過ぎない（GDS 2016b）。

宗教別人口では、圧倒的多数がカトリックであり、その比率は97.6%に達する。ほかにはプロテスタント／福音派（2.0%）、イスラーム（0.2%）などである。

マレーシア

マレーシアは、タイに連なるマレー半島南端の半島部マレーシアと、インドネシアと接するカリマンタン島北部のサバ、サラワクからなる。2010年時点の総人口は2833.4万人で、うちマレーシア市民は2601.3万人（91.8%）にとどまる（DOS 2011, Table 2.1）。外国人労働者が多い社会である。

マレーシアの人口センサスにおいてエスニック集団（*kumpulan etnik*）は、まず、先住民を意味するブミプトラ（*Bumiputera*）とそれ以外に区分される。ブミプトラは、マレー人と「その他のブミプトラ」に分類されている。マレー人は、人口（外国人を除く）の54.6%を占める最大のエスニック集団である。一方「その他のブミプトラ」とは、カダザン、バジャウ、イバン、ビダユなど45のエスニック集団と、「その他のサバ・ブミプトラ」、「その他のサラワク・ブミプトラ」の総称⁷であり、その数は人口の12.8%を占める。ブミプトラの人口、すなわちマレー人の人口とその他のブミプトラの人口を合算した値は、総市民人口の67.4%に達する。

対して非ブミプトラは、人口センサスでは華人、インド人、その他の3種に分類されている。華人はマレー人に次ぐ人口規模の集団で、人口の24.6%を占める。インド人の比率は7.3%で、マレー人、華人と並ぶ「3つの主要民族」のひとつに数えられてきた（鳥居 2017）。「その他」はアラブ人や近隣諸国の出身者などで、その数は人口の0.7%にとどまる。

宗教別の人口をみると、最大集団のイスラームが60.6%、次いで仏教（21.0%）、キリスト教（9.2%）、ヒンドゥー教（6.4%）となっており、この上位4集団で97.2%に達する。

シンガポール

1965年にマレーシアから分離独立したシンガポールは小さな都市国家である。2010年の総人口507.7万人のうち130万人あまり（25.7%）を非居住者が占める。居住者は市民（*Citizen*）と永住者（*Permanent Residents*）に区分され、市民は総人口の63.6%、永住者は10.7%である（SDOS 2010a, Table 1）。

⁷ 詳しくはDOS（2011, Appendix 1）を参照されたい。「その他のブミプトラ」47類型のそれぞれの人口は公表されていない。

人口センサスには居住者の民族構成が記載されており、377.2万人の居住者の内訳は、華人が74.1%、マレー人13.4%、インド人9.2%、その他3.3%となっている（SDOS 2010b, Table 1）。マレーシアの「3つの主要民族」がここでも主要民族だが、人口比は大きく異なる。

宗教別の人口をみると、仏教・道教が44.2%、キリスト教が18.3%、無宗教が17.0%、イスラームが14.7%、ヒンドゥー教が5.1%、その他0.7%となっている。民族別に宗教構成をみると、マレー人のほとんどがイスラーム、華人は6割弱が仏教・道教、インド人は同じく6割弱がヒンドゥー教である。無宗教と回答した者のほとんどは華人で、華人の2割強が無宗教である（SDOS 2011b, Table 59）。

ブルネイ

ブルネイは1984年にイギリスから独立したボルネオ島の小国で、北側の海岸線を除く周囲をマレーシアのサラワク州に取り囲まれている。2011年の総人口は39.3万人に過ぎず、ブルネイ市民は71.6%、永住者が6.6%、一時居住者などが21.8%となっている。

人口センサスでは、民族（Bangsa）をマレー人、華人、その他の3種に類型化しており、マレー人が総人口の65.7%、華人が10.3%、その他が24.0%となっている。宗教別の人口は、イスラームが78.8%、キリスト教が8.7%、仏教が7.8%、その他が4.8%である（DEPD 2012）。

ミャンマー

ミャンマーは東南アジアの西端に位置する。軍政が続いたこの国では長らく人口センサスが実施されていなかったが、2014年3月に31年ぶりに行われた。ただし、バングラデシュと接するヤカイン州、ならびにカチン州、カイン州の一部では、治安上の懸念により調査を実施できなかった（DOP 2015, 8-9）。調査によって測定された人口は5028.0万人、調査できなかった地域の推計値を含めた人口は5148.6万人であった。

ミャンマーは、長年にわたり深刻な民族問題を抱えている。ヤカイン州は冒頭で触れたロヒンギャの人びとのおもな居住地であり、イスラーム教徒のロヒンギャと仏教徒のヤカイン族のあいだで衝突が繰り返された歴史がある。カイン州にはカチン独立機構（Kachin Independence Organisation: KIO）の支配地域があり、2011年から2013年にかけてKIOの武装組織と国軍とのあいだで激しい戦闘があった（岡本 2013; 長田 2014）。カイン州（旧称カレン州）には、ミャンマー最大の少数民族武装組織であるカレン民族同盟（Karen National Union: KNU）が存在し、人口センサスの2年前に政府とのあいだで停戦が合意されたばかりであった。このように、深刻な民族問題は人口センサスの実施をも困難にしたのである。

ミャンマーの人口センサスには、民族 (Ethnicity) に関する質問項目がある⁸。母語・使用言語に関する質問はなく、宗教に関する質問はある。2014 年の人口センサスについては、宗教構成は公表されたが民族構成は公表されていない。

1983 年人口センサスまでは“Race”ごとの人口が記載されており、事実上、これが民族にあたる。当時測定された総人口は 3412.5 万人 (推測値は 3530.8 万人) で、ビルマ族が 69.0% を占め、次いでシャン族 (8.5%)、カレン族 (6.2%)、ヤカイン族 (4.5%)、モン族 (2.4%)、チン族 (2.2%)、カチン族 (1.4%)、カヤー族 (0.4%) と続く (分母は実測値人口)。外来民族 (ビルマ族との混血を含む) は 5.4% に達していた (IMD 1983, Table 11)。この数値は、1973 年人口センサスの数値とほとんど変わっておらず、ビルマ族の比率は 10 年間で 1 ポイント増えただけであった (IMD 1983, Table A-6)。

このことから、いまでもビルマ族が実測値人口に占める比率は 7 割程度ではないかと考えられる。仮に、この数値を 72% としよう。2014 年人口センサスで調査できなかった地域の住民はすべて非ビルマ族と仮定すると、総人口に占めるビルマ族の比率は、 $(5028.0 \text{ 万} \times 0.72) / 5148.6 \text{ 万}$ で 70.3% と推測できる。

宗教別にみると、実測値人口の大多数は仏教徒で、その比率は 89.8% に達する。次いで、キリスト教 (6.3%)、イスラーム (2.3%)、アニミズム (0.8%)、ヒンドゥー教 (0.5%) となっている (DOP 2016, Table 1)。ただし高橋 (2017, 307) によれば、2014 年人口センサスに含まれなかったロヒンギャは 100 万人を越えており、実測値にもとづく宗教別人口比はムスリムの人口を低く見積もっていることになる。

タイ

タイはミャンマーとラオス、カンボジア、マレーシアのあいだに位置し、英仏植民地の緩衝国として東南アジアで唯一植民地化を免れた国である。2010 年のタイの人口は 6598.2 万人で、うち 6327.9 万人 (95.9%) が国籍保有者である。比較的外国人の多い国だが、とくに多いのがミャンマー人で、その数は 130 万人弱、総人口の約 2% を占める (NSO 2012, Table 5)。

タイの人口センサスでは民族は調査項目に入っていないが、家庭で通常使用する言語と宗教を問う項目がある。ただし、どちらもタイ国籍保有者だけに対象を限った数値は公表されていない。

言語については、家庭内でタイ語のみを話す人の割合は、総人口の 90.7% にあたる。タイ語のみを話す人はすべてタイ国籍保有者だと仮定すると、かれらが国籍保有者総数に占める割合は 94.6% にのぼる。このことから、タイ国民を民族別に区分するなら、タイ語を母語とするタイ族が人口の 9 割以上を占める優位集団だといえる。タイ語のみを

⁸ 2014 年人口センサスの質問票は国連人口基金のウェブサイトからダウンロードできる (<http://myanmar.unfpa.org/publications/census-questionnaire>)。

話す人と、タイ語とその他の言語を話す人を合算すると、その数は総人口の 97.1%に達する (NSO 2012, Table 7)。

タイ語以外の言語で、もっとも多くの話者がいるのは、146.7 万人が話すマレー語である (総人口の 2.3%)。マレーシア人の居住者は 8000 人程度にすぎないため、マレー語話者のほとんどはタイ南部のマレー系住民と考えられる (末広 2017, 164-165)。次いで多いのはビルマ語の話者 (82.7 万人) だが、その数を大幅に上回るミャンマー国籍保有者が存在するため、ビルマ語話者のほとんどはミャンマー人であろう。

宗教別にみると、仏教が人口上の優位集団であり (総人口の 93.6%)、次いでイスラーム (同 4.9%)、キリスト教 (同 1.2%) となっている (NSO 2012, Table 4)。

カンボジア

カンボジアはインドシナ半島の南端に位置する。2008 年人口センサス (NIS 2009) によれば、この時点のカンボジアの総人口は 1339.6 万人である。国籍を問う項目がないため、外国人の人口比はわからない。民族を問う項目もないが、母語と宗教に関する質問項目はある。

言語の面では、クメール語の話者が総人口の 96.3%を占め、圧倒的多数派である。このことから、民族的にはクメール語を母語とするクメール族が人口上の優位集団だといえる。少数派のうち比較的数が多いのは、チャム語の話者 (総人口の 1.5%) とベトナム語の話者 (同 0.5%) である。宗教別にみると、総人口の 96.9%を占める仏教が人口上の優位集団である。次いでイスラーム (1.9%)、キリスト教 (0.4%) となっている (NIS 2009, Table 2.8, Table 2.12)。

ラオス

ラオスはインドシナ半島の内陸国で、2015 年の総人口は 649.2 万人である。外国人は少なく、人口の 99.3%にあたる 644.7 万人はラオス国民である (LSB 2016, Table P2.5)。

ラオスの人口センサス (2015 年) は、国内のエスニシティを 49 の集団と「その他・無回答」の 50 種に分類している。最大集団はラオ族で、国民人口の 53.2%を占める。次いでカム族 (11.0%)、モン族 (9.2%)、Phouthay (3.4%)、Tai (3.1%)、Makong (2.5%)、Katang (2.2%)、Lue (2.0%)、アカ族 (1.8%)、Yrou (0.9%) と続く。小規模集団が多く、これら上位 10 集団を合算しても国民人口の 90%に満たない (LSB 2016, Table P2.7)。

宗教別にみると、総人口の 64.7%が仏教徒で、次いで 31.4%は無宗教、1.8%が無回答、1.7%がキリスト教となっている (LSB 2016, Table P2.9)。

ベトナム

ベトナムはインドシナ半島の東端に位置し、南シナ海と接する長い海岸線をもつ。2009 年の人口は 8584.7 万人である。人口センサスはベトナム国民のみを対象としており、国

籍に関する質問項目はない⁹ (CPHCSC 2010a, 4-5)。

2009年の人口センサスによれば、ベトナムには54のエスニック集団が存在する。最大集団はキン族で、総人口の85.7%を占める優位集団である。その他は少数民族であり、キンに次ぐ人口規模のタイー (Tây) 族でも総人口の1.9%を占めるに過ぎない。以下、タイ (Thái) 族 (1.8%)、ムオン族 (1.5%)、クメール族 (1.5%)、モン族 (1.2%)、ヌン族 (1.1%)、ホア族 (1.0%) と続く (CPHCSC 2010b: Table 5)。

2009年人口センサスには宗教に関する質問もあるが、全部で13種の宗教と無記入 (該当者はわずか30人) を合算しても1565.1万人で、総人口の18.2%にしかならない (CPHCSC 2010b, Table 7)。これは質問の形式によるものと考えられる。質問表の宗教に関する項目は、まず何らかの宗教の信者か否かを問う質問があり、イエスと答えた場合にのみ何の宗教の信者かを答える形式になっている。総人口8584.7万人と上記の数値1565.1万人との差分は、この質問にノーと答えた人の人数であろう。つまり、特定の宗教を信仰していない人の数は7019.6人、総人口の81.8%にのぼる。

無宗教に次いで多いのは仏教 (7.9%) で、その他はカトリック (6.6%)、ホアハオ教 (1.7%)、カオダイ教 (0.9%)、プロテスタント (0.9%) などである (CPHCSC 2010b, Table 7)。

第3節 支配的民族集団の有無、支配的宗教の有無という比較軸

前節では、各国の最新人口センサスにもとづいて東南アジア11カ国における民族構成・宗教構成を概観した。図1は、民族 (または言語) と宗教のそれぞれについて、他を圧する規模の支配的集団があるかないかという観点で11カ国を比較して整理したものである。ここでは、総人口ないし市民人口の80%以上を占める集団を支配的集団と定義した。

支配的民族集団が存在するか否か、支配的な宗教があるどうか、という2つの軸を設定することで、次のような理論的な予測が成り立つ。

支配的集団が存在する場合、多数派と少数派の関係は、多数派が政治的強者、少数派は弱者という垂直的なものになる。政治的権力はこの集団によって握られ、教育政策や文化、宗教政策にはかれらの選好が反映される。多数派は、自分たちの文化や宗教こそナショナルな文化でありナショナルな宗教だと主張するだろう。他者に対しては、多数派の文化や宗教への同化を求めると考えられる。少数派は、多数派の支配体制を脅かさない限りは保護され、そうでない場合は厳しく抑圧されるだろう。

⁹ ただし、エスニック集団の類型のなかに「外国人」があり、2134人の該当者がいる (GSO 2010b, Table 5)。

図 1. 人口面で支配的な民族集団・宗教の有無

		支配的民族集団	
		あり	なし
支配的な宗教	あり	タイ カンボジア	フィリピン インドネシア 東ティモール ミャンマー
	なし	ベトナム	マレーシア シンガポール ブルネイ ラオス

(出所) 筆者作成。

一方、支配的集団が存在しない場合、多数派と少数派の関係は水平的、取引的なものになるだろう。とくに過半数集団が存在しない場合、その傾向が強まると予想される。相対的多数派の勢力だけでは政治的決定が困難だからだ。こうした社会では、多数派の利益と少数派の利益のバランスをとるための努力がなされるだろう。政策的には、多文化主義的な政策が採られやすくなるだろう。ひとつの文化や宗教への同化は進まず、その結果いつまでもエスニックな問題が政治的争点であり続けることになると考えられる。

支配的民族集団と支配的な宗教の両方が存在するばあい、支配的民族の信仰が支配的な宗教ということになる。このような社会では、民族面でも宗教面でも多数派と少数派の関係性は垂直的なものになる。どちらの面でも同化政策が採られやすく、抵抗する少数派は厳しく抑圧されると考えられる。

支配的民族は存在するが支配的な宗教がない場合、言語・文化にもとづく多数派と少数派の関係は垂直的、宗教面では水平的な関係にある。こうした社会では、言語・文化については支配民族のそれへの同化を促す政策がとられる一方、宗教面では寛容な政策がとられると予想される。

逆に、支配的民族は存在しないが支配的な宗教が存在するような場合、言語・文化面では集団間のバランスが模索される一方、支配的な宗教がナショナルな宗教と位置づけられ、宗教的少数派は従属的な立場におかれることになるだろう。

最後に、民族面でも宗教面でも支配的集団が存在しない場合、政策はどちらの面でも、集団間の交渉と取引によって決まると考えられる。

東南アジア 11 カ国のうち、支配的民族集団と支配的な宗教の両方が存在するのは、タイ（タイ族・仏教）とカンボジア（クメール族・仏教）である。支配的民族は存在するが支配的な宗教がないのはベトナム（キン族）、その逆はフィリピン（カトリック）、インドネシア（イスラーム）、東ティモール（カトリック）、ミャンマー（仏教）である。

マレーシア、シンガポール、ブルネイ、ラオスの4カ国には、支配的民族集団と支配的な宗教のどちらも存在しない。

東南アジア11カ国の事例は、上記の理論的予測とどの程度合致しているのだろうか。言い換えれば、上記の理論的枠組みで東南アジアの事例をどれだけ説明できるのか。理論と予測が合致しない事例があるとしたら、何が原因でそうなっているのか。これらを確かめることが最終成果に向けた今後の課題である。

おわりに

東南アジアでは、どの国においても民族問題が政治を動かす重要な要因のひとつだが、民族と政治の関係性は国ごとに異なる。それゆえ、この地域のエスニック・ポリティクスに関する研究は、いまでも一国研究が主流である。そうしたなか、東南アジアにおける民族と政治の関係性を概観しようとするなら、どのような枠組みを用いればいいのか。

本稿では、人口センサスを用いて各国の民族構成と宗教構成を整理したうえで、支配的民族集団が存在するか否か、支配的な宗教があるかどうか、という2つの軸を設定することが、簡便だが有益な枠組みになり得ることを示した。この枠組みで、11カ国におけるエスニック・ポリティクスの展開をどの程度説明できるか。それを確かめることが次の課題である。

参考文献

<各国人口センサス報告書>

BPS (Badan Pusat Statistik), Republik Indonesia. 2011. *Kewarganugaraan, Suku Bangsa, Agama, dan Bahasa Sehari-hari Penduduk Indonesia: Hasil Sensus Penduduk 2010*.

CPHCSC (Central Population and Housing Census Steering Committee). 2010a. *The 2009 Vietnam Population and Housing Census: Completed Results*.

-----, 2010a. *The 2009 Vietnam Population and Housing Census: Major Findings*.

DEPD (Department of Economic Planning and Development), Brunei Darussalam. 2012. *Population and Housing Census Report 2011: Demographic Characteristics*.

DOP (Department of Population), the Republic of the Union of Myanmar. 2015. *The 2010 Myanmar Population and Housing Census – The Union Report, Census Report Volume 2*.

-----, 2016. *The 2010 Myanmar Population and Housing Census – The Union Report: Religion, Census Report Volume 2-C*.

DOS (Department of Statistics), Malaysia. 2011. *Population Distribution and Basic Demographic Characteristics 2010*.

- IMG (Immigration and Manpower Department), the Socialist Republic of the Union of Burma. 1986. *Burma: 1983 Population Census*.
- LSB (Lao Statistics Bureau). 2016. *Results of Population and Housing Census 2015*.
- NIS (National Institute of Statistics), Cambodia. 2009. *General Population Census of Cambodia 2008: National Report on Final Census Results*.
- NSO (National Statistics Office), Thailand. 2012. *The 2010 Census of Population and Housing: Whole Kingdom*.
- NSO (National Statistics Office), Republic of the Philippines. 2013. *2010 Census of Population and Housing, Report No. 2A – Demographic and Housing Characteristics (Non-Sample Variables), Philippines*.
- SDOS (Singapore Department of Statistics). 2011a. *Census of Population 2010: Advance Census Release*.
- 2011b. *Census of Population 2010: Statistical Release 1 -- Demographic Characteristics, Education, Language and Religion*.

<日本語文献>

- アンダーソン、ベネディクト (白石隆・白石さや訳). 1987. 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』リポート。
- 岡本郁子. 2013. 「2012年のミャンマー——加速する政治・経済改革——」アジア経済研究所編『アジア動向年報 2013』アジア経済研究所、415-438 ページ。
- 長田紀之. 2013. 「2013年のミャンマー——改革が着実に進展する一方、名に見える成果を求める焦りも——」(アジア経済研究所編『アジア動向年報 2013』アジア経済研究所、459-482 ページ)。
- 末廣昭. 2017. 「タイ——バンコク・メガリージョンの誕生——」(末廣昭・大泉啓一郎編『東アジアの社会大変動——人口センサスが語る世界——』名古屋大学出版会、141-174 ページ)。
- 高橋昭雄. 2017. 「ミャンマー——31年ぶりの人口・世帯センサス——」(末廣昭・大泉啓一郎編『東アジアの社会大変動——人口センサスが語る世界——』名古屋大学出版会、305-307 ページ)。
- 鳥居高. 2017. 「マレーシア——崩れゆく民族構成と増える外国籍人口——」(末廣昭・大泉啓一郎編『東アジアの社会大変動——人口センサスが語る世界——』名古屋大学出版会、175-197 ページ)。

<外国語文献>

- Hicken, Allen, ed. 2010. *Politics of Modern Southeast Asia: Critical Issues in Modern Politics, Volume II, Civil Society, Ethnicity, and Religion*. London and New York: Routledge.

- Miller, Michell Ann, ed. 2014. *Ethnic and Racial Minorities in Asia: Inclusion or Exclusion?* London and New York: Routledge.
- Reid, Anthony. 2010. *Imperial Alchemy: Nationalism and Political Identity in Southeast Asia.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Snitwongse, Kusuma and W. Scott Thompson, eds. 2005. *Ethnic Conflicts in Southeast Asia.* Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Suryadinata, Leo. 2015. *The Making of Southeast Asian Nations: State, Ethnicity, Indigenism, and Citizenship.* Singapore: World Scientific Publishing.
- , ed. 2004. *Ethnic Relations and Nation-Building in Southeast Asia: The Case of the Ethnic Chinese.* Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Tarling, Nicholas. 2004. *Nationalism in Southeast Asia: 'If the people are with us.'* London and New York: Routledge.